





ひろの

「生きてたか。　・・・ボコボコだなあ、のろ亀よ。
だが、でかしたぞ。いいものを見た。」

「参謀長、のろ亀じゃなくて、亀野です。」

しかしマイクへ

「のろ亀、御苦労・・・。」

参謀長、モニターにらみ、

「ウラシマか・・・。　格闘術も、慈愛もすごい・・・。
戦力も、知略も愛も併せ持つ。カリスマ性が見本みたいだ。
万が一、将来、あいつが権力を握ろうものなら、
ちと、まずいかも・・・

陸族に神聖レベル上げられちゃあ、海底族は苦しくなるぞ。

・・・のろ亀よ、助けたお礼、と連れてこい。
桃源郷に来てみては、と言え。

乙姫よ！・・・そこにいたのか。」

「今ここで源氏名言うのやめてください。」

「ウラシマを店で手厚く接待せい。

味方につけるか、腑抜けにするか、だ。

化学班！最後の仕上げの老化ガス、せめて立派な木箱で贈る。」

わかるかな。誰かに都合悪いから、聖人君子は抹殺される。」

尖閣諸島を狙う国の漁船のような女

弥生は、平凡けどまじめなOL。争いが嫌いな優しい性格で、営業部を外されて今は庶務課。趣味はショッピング。会社では知られていないんだけど、借金癖があって、自分でも困っています。今日も、ATMで引き落とし。もっと借金してでも、どうしても手に入れたいものがあったのです。

少し前に、リサイクルショップ「MONO-ROUND」に売ったばかりの魚釣りの絵柄のバッグ。超人気アイドルグループ「KAMI-KAZE」のリーダー・大下クンが、近頃、画家としても評価が高く、まだアイドルとして大ブレイクする前の絵柄の入ったグッズが、将来、べらぼうなプレミアがつく、という噂。

ネットでのこの情報が本当なら、借金を返して余りある、と、一度は自分が売ったものを、買い戻す決意。

情報は、まだそんなに広まっていなくて、ショップでは、通り相場くらいの値段で売っていました。

弥生は、お宝を無事買い戻し、希望を胸に歩いて帰って行きました。

しかし、大下クンデザイングッズのプレミアの情報は、弥生だけのものではありませんでした。美華が財布を忘れ、取って返してもう1度店に戻ると、バッグはたった今、売れたばかりでした。気落ちして店の駐車場に行くと、ふと見た視線の先には、そのバッグを肩に歩く女が。

弥生は、美華が車で先回りしていることを知らずに、その細い路地を歩いていた。道の角で弥生は、出会いがしらに女とぶつかって、衝撃で、バッグは飛んでしまいました。尻餅をついた弥生の目の前で、バッグを拾って、そのまま平然と持ち帰ろうとする美華。

「ちょっと待って！それ、あたしのバッグ、返して！」

「何言ってるの？これは、あたしのバッグよ。見なさい。これはあたしの口紅、これはあたしの指紋。」

今つけたんでしょ、と、美華のむちゃくちゃな理屈に、弥生は怒りがこみ上げてきます。

これは、自分が買った自分のバッグ。他の誰かのものかと疑う余地はありません。

わけあって1度はMONO-ROUNDに渡したけど、買い戻した経緯を店員も知ってるし、レシートだって。

「あら、この時代、パソコンとプリンタがあればそのくらい作れるのよ。違うかしら。」

美華は、全く臆せず自分のバッグだと主張します。弥生は閉口してしまいました。

1つは、むちゃくちゃぶりに。もう1つは、自分の交渉力の無さ。営業を外されるのも道理です。

美華は勝手な理屈を振り回した揚句、バッグを持ったまま立ち去ろうとしました。

「だから、待って！そんなわけないでしょ！」

なおも食い下がる弥生に、美華は、しつこいわね、と言わんばかりに、

「あたしを怒らせないで。怖いお兄さんたちが窓を壊しにいくわよ。ブログも炎上するから覚悟してね。」

美華は、地元で有数の卸売商社の娘。物資の供給を止められては困る企業がたくさんいます。

嘘か真か、猫が趣味、以上の武器を隠し持ってる、ウソつき、商標泥棒、など、良からぬ噂も多いのですが。

気が弱い弥生は、びびってしまいました。最初の、バッグは絶対、自分のものという自信もどこへやら。

それは、ひったくりと脅し行為に他なりません。しかし、美華は少しも悪びれず攻勢に。

「今日は、いっぱい不愉快な思いしちゃったわ。家、調べて、必ず、慰謝料請求しに行きますからね。」

いいこと？自分のものは、自分のものなのよ。人さまのものを、勝手に自分のものにしようとならないで。」

美華の言い分は、勢いはあるものの、どこまでも、自分勝手に客観性も無く、無理やりでした。

しかし、悲しいかな、真理を信じて引かない芯の強さも、悪知恵に勝てる知能も、弥生には無かったのです。

茫然と立ちすくむ弥生をせせら笑うかのように、美華は車に乗り込んで行ってしまいました。

弥生がふと振り返ると、アメリカ人の彼氏、カールが立っていました。

日頃から、いつでも守ってあげるよ、と言ってくれてたカール。弥生は彼の胸に泣きつきました。

「カール！そこで見てたんなら、どうして守ってくれなかったの？」

カールは優しく言いました。

「バッグがどっちのものか、それは君たち2人の問題さ。それから、罪は償わないとね。」

いざという時にすぎたところで、突き放すだけのカール。こいつ、あてにできない……。

彼の叔父の「MONO-ROUND」もまた、美華の機嫌を損ねると困るようです。

弥生は、手ぶらで茫然と帰ります。正しいことって、何なの？どうだったら「確かに、自分のもの」なの？

財力、暴力、影響力、力が強いことが物を言う、原始に戻ったような無法時代に、どう生きればいいのか？

健気にも

シンディ・レイラは 継母にこき使われて 必死に生きてた。

家事全般、家のリフォーム、自家菜園、

働くほどに たくましくなる。

工夫して ガーデニングや洋裁は楽しくこなして 特技になったた。

町なかで エネルギッシュな暮らしぶり 注目されて、大評判に。

能力を 活かして楽しむ生き方が 国のみんなの お手本になる。

輝きが放っておかれるはずがない。 気が合う伴侶と共に生き抜く。

住民は 充実人生謳歌して その中心に カリスマ・レイラ。

継母と2人の姉は涙した。

「よくぞ、ここまで育ててくれた。」

その様子 魔王が見てた 予言鏡。 拳がふるえ 苛立ち露わ。

「庶民ども、ムダに自我など持たんでいい！ 税金払って枯れてりゃいいんだ！

この通り、台頭されては、かなわない。 政府の支配も危うくなるぞ。」

魔導師を レイラのもとへさしむけた。

さあ、有名な童話の始まり。

「極上の 女の幸せ つかみなさい。 王子のそばで 埋もれるがいい。」

数年後、女王レイラは 食べて寝て

庶民は毎日、ふつうに過ごした。

吾輩は猫である。名前はまだ無い。

中国さんと日本さんと台湾さんの家の間の路地や空き地をうろうろして過ごしてた野良猫だ。

1895年のある日、日本のお父さんと末娘の沖縄ちゃんの散歩の途中、吾輩は拾われた。

「せんかく」と名付けられて、沖縄ちゃんが吾輩のご主人ということに決まった。

その頃、日本のお父さんはボクシングにハマってて、その日、強い強いアメリカさんと試合した。お父さんは大苦戦。仲間に、次のラウンド、場合によってはすぐタオルを入れる、と言われても、タオル欲しがりません、勝つまでは。と言ってフラフラとリング中央に行っちゃったという意地っ張りだ。

その直後。後に「伝説のアトミックパンチ」と言われる強烈な奴を「よこ腹」と「鼻先」に浴びて壮絶K・O。

瀕死の重傷を負ってしまった。そこまでしなくても、と思わないか？

この試合、ボクシングジムの確執が背景にあったそうさ。

ドイツさんイタリアさんと組んでアメリカさん中国さんをはじめとする「連合」と対立してたとか。全部、人づてに聞いた話さ。吾輩は、猫だからな。吾輩は、お父さんがぐったりしてたのは覚えてる。

稼ぐ役目のお父さんが瀕死の重傷を負って、日本は困った。とりわけ、沖縄ちゃんを持て余してた。

それで、沖縄ちゃんを引き取る、と申し出たのが、なんと、そのアメリカさんだ。

吾輩はといえば、沖縄ちゃんの持ち物以外の何ものでもないとして、いっしょに連れて行かれた。

吾輩にとっては、沖縄ちゃんと暮らす状況は、別に変わらなかった。

ドラマをよく見た。悪趣味だ、と思うかも知れないが、遺産相続が、とか、どろどろしたのが好きだった。

音信不通だった三男、のこのこ出てきて、血縁のある俺にも権利が、じゃねえ！という兄に、同意。

1972年に、沖縄ちゃんは元気になったお父さんの家に戻ることができた。むろん、吾輩もだ。

吾輩の主人が沖縄ちゃん以外の誰かだったことは、野良猫から飼い猫になって以来、1度もない。

それを、中国さんがいきなり、吾輩のことを、自分の「ウオツリ」だと言ってきたのには驚いた。知らない話さ。アメリカさんに沖縄ちゃんともども連れてかれても、赤の他人で我関せず、だったくせに。

血のつながった三男でも、権利が、じゃねえ！って話があるのに、中国さんはもっと関係なくない？

よくよく聞いたら、吾輩は、高級な猫と高級な猫の間に生まれた、よほどの価値の高い猫なんだとか。

人間の言うこの「価値」というのが、吾輩にはいまいちわからない。ただ仲よくしたいのだけ。ま、要するに、欲しい、ってわめいてるだけ。ただ、その程度のことに、お父さんの様子がどうも変。

何かといえば、吾輩のことで中国さんに配慮って。ま、中国さん、モラルが無くて怖いけどね。思えばお父さん、沖縄ちゃんの進路のことも、アメリカさんの意向は、ばっかり言って険悪になってる。

ボクシングで負けてから、ふぬけになっちゃった。ホントは、ご主人様の親に、言いたくないけど。

ただね。書いたとおり、吾輩の主人は沖縄ちゃんさ。経緯をちゃんと書ける。

中国に、吾輩を自分の物と言える根拠はない。あるんなら、ちゃんと聞きたいと思ってる。

それにしても、お父さんが、これほどはっきり自分のものである吾輩も守れないほどのふぬけで、今、ものすごく不安になって暮らしている。吾輩の暮らしはこれから、どうなるのだろう？